

「イージーライフ」

片岡
陸

登場人物

藤井拓也 (25)

テレフォンオペレーター

細野茂 (41)

喫茶店のマスター

加藤裕美 (22)

拓也の彼女 大学生

若林浩太 (30)

ライブハウスのオーナー

川瀬舞花 (34)

花屋の店員

拓也の同僚

裕美の友人

○コールセンター

小ぶりなビルのワンフロア。

目をつぶり、瞑想でもするように腹の前で丸型に両手を組んで、ワーキングチェアに姿勢よく座る拓也。

ヘッドセットから流れてくる音声に耳だけ傾けつつ、深呼吸してリラクセスしている。

茂「だからさあ……何回同じこと言えはいいのよ。俺そんなに難しいこと言っていないだろ？ ただ指示通りの場所に荷物を届けてくれって、そうお願いしてるだけでよ？」

拓也、目をつぶったまま、小さく息を吸い込む。

拓也「おっしゃる通りです。担当の配送員にはしっかりと……」

途中で声がかえ、咳き込む。

茂「おーい大丈夫？」

拓也、しばらく咳き込んだ後で、独特の甲高い咳払いを鳴らし、

拓也「申し訳ございません。もう大丈夫です」

茂「あんた、いつもやたら咳してるよなあ。」

ホントに大丈夫かい。若いんだろうに」

茂の語調に怒りの色は無い。

拓也、あくびをしながら、伸びをする。

拓也「はい。ありがとうございます。おそろ

くタバコの吸い過ぎだろうと思います」

向かいの席に座る同僚が、訝るような

ニヤついた顔で、拓也の方を見ている。

茂「そんなこと俺に言われても困るよ」

と、変わらず平坦な口調で。

拓也「失礼いたしました」

茂「まあとにかくちゃんと頼むよ。あんたの

声なり特徴を覚えちゃってるのも、なんて

いうか、こつちとしちや不本意なんだから」

拓也、再度謝罪の言葉を口にし、電話

を切る。首を捻りポキッと鳴らし、腰

を捻りポキポキッと鳴らしてから、席

を立ち上がる。フロアを歩いていく。

同僚「おーいタク坊。またあの人か？」

拓也、声をかけられ、足を止める。

拓也「うん。その人」

同僚「またいつものクレームだろ？」

拓也「まあクレームってゆうか、そうだね、

配達が指定の場所と違ってたらしい」

同僚「つかお前、どんな会話の流れで『タバ

コの吸いすぎ』なんてワードが出んだよ」

拓也「いや俺が途中で咳き込んだじゃってさ。

自分では全然気づかなかったんだけど、ど

うやらいつもそうらしくて、それで向こう

が心配してくれたんだ。それで、言った」

同僚「なんだそれ。まーとりあえず、あの

はお前に任せるって暗黙の了解でもう決ま

ってんだから、これからも頼みますよ」

拓也「やっぱりわざとだったんだ。誰も電話

取らないんだもんね。俺が取るまで」

同僚「みんな番号覚えちゃってるからなあ」

と、電話のコール音が鳴り、同僚はへ

ッドセットを付け直して、前を向く。

拓也、ぼんやりとフロア全体を見渡す。

何人かの従業員がヘッドセット越しに言葉を発し、中には大きく身振りを添えたり、パソコンの画面に向かって深く頭を下げたりしている人もいる。拓也、あくびをしながら、伸びをする。フロアを出て、エレベータで屋上へ。

○喫茶店

客のいない店内。回るレコードからは古いジャズが小さな音量で流れている。カウンターの椅子に座る茂。手元の段ボールを開けると、定期便で購入している睡眠サポートのサプリメントが数箱入っている。憂鬱な気分になり、誰もいない店内を見渡す。か細いため息をつき、タバコに火をつける。

○ビルの屋上・喫煙所（昼）

拓也、扉を開け、屋上に出る。
スーツを着た男がスタンド灰皿の横に

立ち、タバコを吸っている。金網越しに大通りを見下ろしながら、空いた手でしきりに首筋を搔いては、革靴のつま先を忙しなく地面へ打ちつけている。

拓也「こんちわぁ」

と、側にあるベンチに腰を下ろしながら軽い語調で声をかけるも、男は拓也を一瞥しただけで、何の返事もしない。拓也、慣れているのか、構わずタバコを吸う。空は晴れている。風もない。

× × ×

拓也、ベンチから立ち上がると、タバコを啜えたまま、腰に手を当てて上体を反らしたり、丹念にアキレス腱を伸ばしたりする。男、疎ましそうな様子で拓也のことをチラチラと見ている。

男「もしもし……あっはい……ちようど今資料の方を確認していたところで……」

男、スマホを耳に当て、小走りで屋上から去っていく。ストレッチを続けな

がら、その後ろ姿を眺める拓也。

再びベンチに座り、ぼーっとタバコを吸っていると、無意識に左手がギターの弦を抑える動きをしている。左手の動きに合わせて、小さな声で何かの唄も口ずさんでいる。しばらく続ける。吸い殻を灰皿に落とし、立ち上がる。歩きながら、咳き込む。あくびをする。

○喫茶店（夕）

茂、店内の電気を消し、店の外にある夜間バー営業用のメニュー看板を中に入れる。再び外へ出て鍵を閉め、扉の掛け札を「CLOSE」に裏返す。通りを歩いていく。

花屋の軒先で一人の女性が植木に水をやっている。

舞花「あつ。さっきはご馳走様でした」

茂「ああどうも」

舞花「お出かけですか？」

茂「ええ。ちよつと用事があつて」

舞花「じゃあ夜はお店お休み？」

茂「はい。今日は店閉めてます」

舞花「そうですか……それじゃあ」

舞花、淑やかに微笑んで、店の中へ。

茂、しゃがみこみ、舞花が手入れをし

ていたラベンダーに顔を近づける。

良い匂いだなと思う。再び歩きだす。

○ラーメン屋

煙がかつた店内。仕事終わりのサラ

リーマンや若者などで混んでいる。

茂、カウンターの真ん中に座る。

茂「チャーシューメンを。ネギ抜きで」

厨房の店主、チラッと上目遣いに茂を

一瞥し、無言でさりげなく頷く。

一人客が続々と店に入ってくる。

茂、カウンターに両肘をつき、調味料

をぼんやりと眺める。目を閉じる。

○ライブハウス・雑居ビルの二階

中は暗く、既に演奏が始まっている。

茂、足音を潜めて歩き、後方のパイプ椅子に腰を下ろす。

浩太、茂の姿に気づくと、すぐにカウンター奥から出てくる。

浩太「シゲさん、おつかれっす。来るなら言ってくださいよ。珍しいじゃないすか」

茂「ああ悪い。なんとなく……ほんとになんとかなく、ふらっと来たくなっけ。てか、

驚いたよ。結構客入ってるんだな」

浩太「いやー全然すよ。今日はたまたま。あの子。今唄ってる子。今日が初めてなんですけど、SNSで結構人気で、なんか知り合いも多いらしくて。声良いっすよね」

小柄な若い女の子がステージ上で高いカウンターチェアに座り、テレキャスターを抱えて、静かに唄っている。

猫が鳴くような優しく可愛らしい声。
茂、あまり惹かれず。

浩太「今日は店休みですか？」

茂「うん。閉めてきた」

浩太「そうなんすね。ビールでいいですか？」

茂「いや、アルコールはいい。お茶とか、そ

うだな、ウーロン茶か何かもらえる？」

浩太「承知です」

軽快にそう言い、カウンターの中へ。

フロアの客は比較的若者が多く、手に

持ったドリンクを飲みながら、ゆるい

曲調に合わせて上体を揺らしている。

浩太、プラスチックのカップに入れた

ウーロン茶を茂に手渡す。

茂「ありがとう」

二人、無言でステージ上を見つめる。

浩太「純粹な疑問なんですけど、やっぱあれ

なんすか、こういうの見てると、また演り

たくなったりするもんすか？ それとも、

もう別に何も思わないっつうか、完全にリ

スナー側の気持ちなんですか？」

浩太の声色に邪気は無い。

茂「別に何も思わないな」

浩太「それ、すごいっすよねえ。俺なんて、
すげえやつとか見ると、悔しくて、速攻で
ウズウズしてきちゃいますもん。まあ、ま
ずしばらくは見惚れちゃいますけど」

茂「だって、お前はまだ現役だろ」

浩太「まーそうっすけど」

と、手に持ったビールを勢いよく飲む。

茂「あの子どう思う？」

浩太「あの子って、あの子ですか？」

と、顎でステージ上を指す。

茂、頷く。

浩太「うーんまあ……声がいいっすよね」

茂「そうだな」

浩太「あと普通に可愛いっすよね」

茂「確かに可愛いな」

浩太、小刻みに足でリズムを取りなが
ら、楽しそうにステージを見ている。

茂、やはり良さがわからない。

浩太「シゲさん、まじで酒いらなっすか？

もちろんタダですよ。俺の奢りです」

と、歯を見せて、いじらしく笑う。

茂「いやいいよ。今日は本当に大丈夫なんだ。ありがとな。お前、なんか優しくなったな」

浩太「何言ってるんすか。今までどんだけシゲさんに飯食わせてもらったか。どんくらいだろ、六回くらいはありますよ、たぶん」

茂「そういうのは数えなくていいんだよ」

二人、声を出さず、そっと笑い合う。

浩太「考えてみりゃここも、シゲさんがやってた頃とは随分変わりましたよね。なんつ

ーか、雰囲気も客層も、演者の感じも」

茂「そうだな。それでもこうして続けているのは、全部お前が頑張ってるおかげだ。今さらだけど、本当に感謝してるよ」

浩太「まーのらりくらりです。まさか俺も三十代でライブハウス持つことになるなんて、夢にも思ってたんですけどね」

茂「俺だって、引き受けてくれるとは思ってなかったさ。しかしすごいよ。俺にはとて

も無理だ。もし俺が続けてたら……お前じやなかったら、きつととつくに潰れてただらうなって、今、心の底からそう思ってる」

互いに黙り込み、妙な沈黙が流れる。

浩太「どうして俺だったんすか？」

茂「お前しかいなかったんだ」

浩太「それ、褒め言葉ですかね？」

茂「最大級の賛辞のつもりだよ」

浩太「へへっ：あざす」

演奏が終わる。ステージ上の女の子はギターを肩から外すと、深々と一礼。フロア中から穏やかな拍手が鳴る。

浩太、両手を目一杯に叩いている。

茂、おもむろにタバコを取り出す。

浩太「あ、シゲさん。あっちっす。そうなんすよ、喫煙スペース別に作ったんです。中には嫌な子もいるんで。いやあ：変わっちゃいましたよ時代も。ホントすんません」

茂「ああそうか。わるい。そうだよな」

茂、廊下にある隔離された喫煙スペース

スで、タバコを吸う。横には若い男がいて、スマホをいじりながら、電子タバコを啜えている。背が高く、黒いマッシュルームヘアは艶めいている。フロアを占めていたざわめきが止み、次の演奏が始まると、男はスマホをしまい、小走りでもフロアへ戻っていく。茂、二本目のタバコに火をつける。壁に背をもたせて、天井に細く立ち昇っていく煙を見つめる。目を閉じる。

○公園（夜）

水の枯れた噴水の淵に座る拓也。

アコースティックギターを抱えている。

拓也「あー今出ちゃってるよ。うん、今日は

公園。いや誰もいないね。いつも通り」

スマホで誰かと話している。

と、缶ビールを片手に持った茂が少々

千鳥足で、向こうから歩いてくる。

拓也「じゃあ切るわ。帰るときまた連絡する」

と、スマホを脇に置く。

茂、拓也の前で立ち止まる。

近くに人はいない。

拓也「どうもー」

茂、軽く頭を下げ、タバコを啜える。

拓也「あっすいません。火貸してもらえたり

します？ ちょっと家に忘れちゃって」

茂「ああ：どうぞ」

茂、ライターを手渡す。

拓也、へらへらと笑いながら受け取り、

タバコに火をつける。

互いに無言でタバコを吸う。

拓也「あーうま」

拓也、携帯灰皿に吸い殻を押し込む。

茂、その様子をじっと眺めている。

拓也、茂がどうやらその場を動かかなそ

うな雰囲気を感じ、

拓也「じゃあどうせなんで」

と、ギターを鳴らし、渋々歌い始める。

カバー曲。目の前に人がいることなど

忘れたように、とにかく楽しそうに、
目をつぶって歌う。とても綺麗な声。
茂、歌う拓也の姿に目を奪われ、聴き
入っている。タバコが指先から地面に
落ちる。込み上げる何かを感じる。

× × ×

拓也「どうもお粗末さまでした」

恥ずかしそうに頭を下げる拓也。

茂「良かった……すごく」

茂、缶ビールをひと口だけ含み、放心
したように呟く。

拓也、照れ臭そうに顎を掻き、小さく
咳払いをする。痰が喉に絡んでいる。

茂「いつもここでやってるんですか」

拓也「いや、あんまり決めてないんです。で
も大体はここか、あとは駅から少し離れた
ガード下の広場か、向こうの小川沿いの緑
道のベンチか、そのどこかって感じです」

茂「自己紹介の紙とか、なんて言うのかな、
スケッチブックみたいなやつ、置いてない

んですか？ 名前とかSNSの宣伝とか！

拓也「あーないです。僕あれなんですよ、ただ歌ってるだけで、ホントにカラオケ感覚で。仕事でストレス溜まったりすると、こうやって一人で歌って、発散してるんです。なんかほら、やっぱり外で歌うと気持ちいいじゃないですか？」

拓也、中々痰が取れず、再び咳払い。

茂、拓也の言っている意味がすぐには理解できず、不思議そうな表情で拓也を見つめている。

茂「じゃあなんだ……歌手を目指してるとか、そういうのではなくってこと……？」

拓也「ははっつ。そんなの思ってみたこともないです。柄じゃないし、身の程がありませんから。だから実はこうやって、ごくたまに人が止まって聴いてくれるんですけど、なんか照れ臭くてしょうがないんですよ」

茂「いやでも……すごく……すごく良いよ」

拓也「困るなあ、そんなに煽てられちゃうと」

と、子供みたいに顔を綻ばせて笑う。

茂「リクエストとかしてもいいのかな」

拓也「うーん……まあじゃあ今日は特別に」

茂、拓也の横に腰を下ろす。

茂「エレカシとかどうか」

拓也「ああいけますよ。結構好きっす」

と、再び目をつぶり、歌う。声は公園

中に響き渡るが、辺りには誰もいない。

茂、顔を伏せ、目をつぶって聴く。

拓也「ふっーやっぱ……きちいー」

茂、真剣な表情で丁重な拍手をする。

茂「素晴らしい」

と、立ち上がり、財布を取り出す。

拓也、それを見て、慌てた様子で、

拓也「いいですいいです。そういうのはホン

トに。むしろやめてください」

と、身を乗り出すようにして止める。

茂「どうして」

拓也「ただの自己満足なんです。お金なんて
もらうような代物じゃないんですよ」

茂「それはこっちが決めることじゃないか？」

拓也「だとしても、だったらこっちにだって、

断る権利くらいはあるはずですよね」

茂「……」

拓也「だったらお菓子とか、そうだなあ、甘

い和菓子とか、そっちの方が僕はよっぽど

嬉しいですから。まー冗談ですけど」

茂「いつやってるのかな」

拓也「それもまじで気分によりけりですて、

文字通り不定期開催ってわけです」

拓也、唐突に甲高い咳払いをする。

やっと痰が取れ、すっきりした顔。

茂「でも、ここか、ガード下の広場か、小川

沿いの緑道に行けば、そのどこかにはいる

んだよね。仕事で嫌なことがあった日は」

拓也「ははっ：そうっすね。でもあれっすよ、

あんま見にこないでください。それはなん

てゆうか、本望じゃないんですから」

と、俯いて、ぎこちなく微笑む。

茂、背を向け、歩きだす。

しばらく進み、一度振り返る。

拓也、恐縮そうに肩をあげて会釈する。

茂の姿が見えなくなる。

拓也、ギターを置き、あくびをして、その場に寝転ぶ。スマホを取り出し、

拓也「あーもしもし。うん。今から帰るよ」
無表情でぼんやりと夜空を見上げる。

○拓也の自宅・ワンルーム

拓也、足を広げて台所に立ち、鼻唄を歌いながら、納豆をかき混ぜている。

裕美、ソファーに座ってスマホをいじっている。部屋にテレビは無く、大きなプロジェクターが壁の一面を覆っている。本体の機器は冷蔵庫の上にある。

拓也「おーい。レンジ終わってるー」

と、背中を向けたまま言う。

裕美、黙って立ち上がり、レンジから餃子を取り出す。続けて冷蔵庫からコンビニで買った惣菜をまとめて出す。

裕美「何にする？ ビール？」

拓也「じゃあビール」

拓也、二つの小皿を両手に持ち、ローテーブルへ置く。皿に入っているのは冷奴に納豆とめかぶを乗せたもの。

裕美「うわ出た。久々見た」

拓也「ウチで飯食うの久しぶりだもんな」

二人、並んでソファへ座り、無言で缶ビールを合わせると、飲み始める。

拓也「てかさうだよ。すげえじゃん。内定、もらったんでしょ？」

裕美「あーうん。もらった。ちよーいところだよ？ ラッキー。ウチもう勝ち組かも」

と、どこか投げやりな乾いた語調で。

拓也「スーツ着るんだ？」

裕美「スーツ？ まあ着るだろうね」

拓也「毎日ミーティングとかするんでしょ？」

裕美「わかんないけど、するんじゃない」

拓也「すっげー」

裕美「なにそれ」

拓也「それって本当にすごいことだと思うよ」

裕美、手を止め、何か考え込む様子。

裕美「ねえあのさ、ちよつとだけ真面目な話
していい？」

拓也「もちろん。ちよつとじゃなくても」

裕美「たつくんは今の仕事ずっと続けるつもりなの？」

拓也「どうだろうなあ……ずっとかはわからないけど、今のところ別に不満もないし」

裕美「やってて、楽しいの？」

拓也「楽しくはないかなあ」

裕美「なのに、不満はないの？」

拓也「全くないね」

二人、自然なリズムで見つめ合う。

裕美「すごい言いづらいんだけど、たぶんさ、
私の方が収入多くなっちゃうと思うよ」

拓也「それはすばらしい」

裕美「真面目に聞いて」

拓也「はい。うーん……まあでもぶっちゃけ、
最初はいい勝負くらいなんじゃない？」

裕美「時間の問題だと思う」

拓也「ははっ。確かにそうかもな」

裕美「いいの？」

拓也「なにが？」

裕美「わかんないけど、なんか色々」

拓也「すごいなあって思うだけだよ。だって、

一緒に暮らしてるわけじゃないんだし、ま

してや養ってもらわなくてもないんだしさ」

裕美「それはそうだけど」

裕美、餃子やたこぶつなど、コンビニ

で買ったものばかりつまんでいる。

拓也「それに、別にひろみだって、いつまで

もずっと俺といふつもりはないだろ」

裕美、その言葉を聞き反射的に何か言

いかけるが、皿を持ち上げて納豆を頬

張る拓也の姿を見て、諦めたように口

をつむぐ。ビールを一口飲む。

拓也「あーまじうめえ。なあ、食った？」

と、机上の納豆めかぶ豆腐を箸で示す。

裕美、しばらくそれを見つめてから、

皿を持ち、ゆつくりと一口食べる。

裕美「おいしい」

拓也、目を細めてくしゃつと笑う。

拓也「そういえばさつき、ひろみから電話きたすぐ後くらいかな、おっさんが来てさ。

なんかリクエストとかされちゃって、すっげえ緊張したよ。困るよなあ、ああいうの」

裕美、横目で拓也の表情を伺い見て、

裕美「何か言ってた？」

拓也「うん。良かった、つて」

裕美「そう言われて、どう感じたの？」

拓也「どうつて？」

裕美「嬉しかったの？」

拓也「まあそりゃ悪い気はしないよ」

と、インターホンが鳴り、宅配のピザが届く。拓也、玄関へ行き、受け取る。

拓也「うわっびっくりした。ひろみ、今やばかったぞ。今の横顔。めっちゃくちゃ可愛かった。やっぱりひろみって美人なんだなー」

ケラケラ笑いながら、ソファーに座る

拓也。裕美、切なげな顔でため息をつき、ピザを開ける。無言で食事が進む。

拓也「あ、てか今日ってさ。セックスする？」

裕美「は？」

拓也「セックス。このあと」

裕美「どうして？」

拓也「いや、だって、それによって観る映画も変わってくるし」

裕美「映画観ることは決定してるの？」

拓也「やだ？」

裕美「どっちでもいいけど」

拓也「で、セックスは？」

裕美「どっちでもいい」

拓也「なんか最近性欲ないんだよなあ」

裕美「どっか調子悪いの？」

拓也「それが、全然そんなことはないのよ。

たぶん総量の問題だと思うんだわ。ちゃんと溜まるまで時間がかかる感じっつうか」

裕美「おじいちゃんだ」

拓也「いや、ほんとそう。おじいちゃん。も

う余生です。どうか優しくしてください」

裕美「やめて。冗談でも笑えない」

拓也「笑ってんじゃない」

裕美、拓也から目を逸らす。

裕美「いいよそんなの。そもそも最近全然してなかったじゃん。てかそう言われると、

私がやたら性欲強い人間みたいに聞こえる」

拓也「実際そうだもん」

裕美「だから言ってるでしょ。これが普通。

至って標準なの」

拓也「じゃあ俺は普通じゃないってことだ」

と、肩をすくめて笑いながら。

裕美、返答せず、ピザをかじる。

拓也「タクシードライバーでいい？」

裕美「なにが？」

拓也「映画」

裕美「それ、もう何回も観てない？」

拓也「俺はえーと……六回目かな。やだ？」

裕美「なんでも。どうせ寝ちゃうし」

拓也、部屋の電気を消し、プロジェク

ターのスイッチを入れる。スクリーンが徐々に明るくなっていく。

裕美「たつくんってさ。寂しくなったりしないわけ？ 夜、一人でいるときとか」

映画、始まる。オープニングが流れる。

拓也「寂しくないわけないよ」

裕美「でも、それをどうにかしたいとも思わないんでしょ？」

拓也「さすがよくわかってるね」

裕美「どうしてなの？」

拓也「知らないよ。生まれつきじゃない？」

そういう性分なんだろうな、きっと」

裕美「ずるいよそういうの。ちゃんと考えて

答えて。はぐらかさないで」

拓也「俺にも全然わかんないんだよ。だけど、全然これでいいんだよ。本当に満足なんだ」

裕美「じゃあさ、だったら、もういつ死んでもいいってことじゃん。そうでしょ？」

拓也「いやー死ぬのは嫌だよ。怖いもん」

裕美「だって、ずっと今の繰り返しじゃん」

拓也「そうそう繰り返し。いいじゃん。すばらしいじゃん。こういう旨いもん食ってさ」

裕美「でも世の中には、年上の人にこんなこと言うのアレだけど、たっくんの知らない世界がまだまだたくさんあるでしょ。人とのお会いもそうだし、感情にしたって、たっくんがまだ味わったことのない種類の気持ちさが、身体の中に眠ってるのに、気づかないまま終わっちゃうかもしれないじゃん」

拓也「うん。そりやそうだ」

裕美「もったいないよ」

拓也「食いもんは残さず食べるけどね」

と、はぐらかすように笑いながら。

裕美「もったいない」

拓也「わかるよ。ひろみが言ってることは。

だけどさ、なんて言えればいいのかなあ……

キリがないんだよ」

会話をよそに、映画は流れ続けている。

裕美、最後のピザを手に取り、かじる。

拓也「でも、今ひろみが言った『味わったこ

とのない種類の気持ち』ってやつ。あれだわ、さつき公園でおっさんに『良かった』って言われたとき、それ湧いたかも。よくわからんけど、なんか新鮮ではあった」

裕美「新鮮？ 嬉しいとは違うの？」

拓也「違うなあ。まあほら、俺、昔から何かで人に褒められたことなんて、ほんと皆無だったから。変な安堵？ ……みたいな」

拓也、スクリーンをじっと見ている。

裕美、拓也の横顔をそれとなく見る。

拓也「ごめん。もう一回初めから観ていい？」

裕美「え、なんで？」

拓也「全く内容に集中できてなかったことに、今ようやく気づいた」

裕美、フツと小さな笑い声を漏らし、

裕美「ご自由にどうぞ」

拓也、映画を巻き戻す。

裕美、大きなあくびをすると、拓也の膝を枕にしてソファーに寝転ぶ。
再び映画が最初から流れ始める。

裕美、ゆっくりと目を閉じる。

拓也、無表情でスクリーンを眺める。

○コールセンター

長く鳴り続けていた電話を拓也が取る。
向かいに座る同僚、ニヤついている。

× × ×

茂「おいおいあなた……今なんて言った？」

拓也「大変失礼いたしました」

茂「ご無沙汰しております、つて言わなかつ

た？……言ったよね？」

拓也「申し訳ございません……あまりに馴染み

深いお声だったもので……つい……」

茂「なんだか嫌味に聞こえなくもないが」

拓也「全くもってそういうつもりでは……」

茂「いや、それはわかる。あなたに他意が無

いのは、なんとなくわかるよ」

拓也「恐縮です」

茂「それにしても、全く調子が狂うな。また
あんたと話してる。定期的な配達の不備と

いい、電話の担当といい、これは何か別の大きな力が働いてたりするのかな？」

拓也「配達に関しては……お詫びのしようもございません。担当について、こちらは偶然と言う他ないのですが、もしもお客様が別スタッフの対応をご希望でしたら……」

途中で声がかえ、咳き込む。

茂「おーい……大丈夫かあ？ またタバコの吸いすぎか」

拓也「ええ……おそらく……」

しばらく咳き込む。それから、例の特

徴的な咳払いを一つし、

拓也「毎度毎度失礼しております」

茂「どうしてそんなにタバコ吸うんだ？」

拓也「それに関しては……なんというか……

自分自身でも不明でございまして……」

茂「よくないな」

拓也「全くです。差し出がましいようですが、お客様は吸わない方ですか？」

茂「いや吸うけども」

拓也「明確な動機はお分かりですか？」

茂「単なる習慣……まあ依存だろうな」

拓也「左様ですか。それを聞いて少し気が楽になりました。私もきっと同じだろうと思います。それで、先ほどの件ですが、もし他のスタッフ対応をご希望でしたら……」

茂「いやいいんだ。あんたでいい。あんたの声は、なんていうんだろうな、すごく耳触りが良い。配達のコオリテイが一向に改善されないのは甚だ不快に違いないが、あんたと話してると……不思議だな、嫌な気分を必要以上に引きずらないで済む」

拓也「それは……ありがとうございます」

茂「で、本題だが……いや、もういい。とにかく、また玄関前に無断で置かれてた。まあ……良しなにやってくれ。それじゃあ」

電話が切れる。

拓也、拍子抜けしたような面持ちで、パソコンの画面を眺める。ヘッドセットを外し、フロアを歩いていく。

同僚「タク坊ー。今日はやけに短かったな。

わりと手馴れてきたんじゃないか？」

と、笑いながら、潜め声で呼びかける。

拓也、ひどくぼーっとしていて、同僚

の声が全く聞こえていないかのように

そのまま歩いていき、ひとりで屋上へ。

○喫茶店（夕）

カウンターの端に舞花が座っている。

他に客はいない。

舞花「へえ……音楽をやられてたんですか」

茂「ええ。まあ随分前のことですが」

舞花「それでご結婚はされてなくて……」

茂「彼女もいません」

舞花「なんか……すいません。根掘り葉掘り、

色んなこと聞いてしまっただけ」

茂「いえ。今答えていて、改めて、自分がど

れだけ惨めな人間か痛感できました」

と、自虐めいた口調で笑う。

舞花「惨め？ どうして？」

茂「要するに：何も無いんです。過去のことを引きずってるわけじゃない。そんなのはどうしようもないし、運だって巡り合わせだつてある。でも今、何も無い。何かを諦めた時から、自分の身の程がわかりきっちゃった時からずっと、もう長いこと、意欲がないんです、生活に。何もかも空っぽで、ただ生きてるだけで。時間も体力もあり余ってるはずなのに、なんか精一杯なんです」

舞花、茂の目を見つめながら水を飲み、
舞花「詳しい事情は全く知らないけど、でも、みんなそんなもんじゃないかしら？」

茂「そうなんですかね」

舞花「それに、あなたは、少なくとも私から見れば、ちっとも空っぽじゃありません」

茂、無言で口を結び、舞花のコップに水を注ぎ足す。

舞花、茂の発言を待っている。

茂「何か、あるように見えますか」

舞花「はい。優しいです」

茂「優しい？」

舞花「こうして、黙って空いたコップに水を注いでくれる。私がナポリタンにどれだけチーズをたくさんかけても、何も言わず、新しいチーズの小皿を前に置いてくれる」

茂「それは…仕事ですから」

舞花「ええ。でも、私はそうされて、とても嬉しいです。心が温かくなります。午後の仕事も頑張ろうって思えます。私はね、優しさっていうのは、本人がどう思うかじゃなくて、相手が感じることだと思いますよ。本人がどう思っているのが、相手が、この人優しい、って思ったなら、その人は優しいんです。だから、あなたは優しいんです」

茂「恐れ入ります」

舞花「それにあなたの笑顔。ちよつと卑屈そうに下を向いて、唇を歪めるその笑顔。とっても素敵ですよ。良いなあって思います」

茂「今日はまたすごい褒めてくれますね。何か嫌なことでもあったんですか？」

茂、目を伏せて、卑屈そうに笑う。

舞花「いえ…何も。ただちゃんと思ってることは言おうと思ってる。私もしんどいし…」

茂「え？」

舞花、目を逸らして、水を飲む。

茂、皿を拭く手を止め、舞花を見る。

沈黙。

舞花「さっき、空っぽっておっしゃいましたけど、私だって、これといった意欲なんて無いです。でも、生活がプラマイゼロになるくらいの楽しいことは時々ある。それで十分だと思って生きてます。あなたにだつて、それくらいあるでしょ？ いつもとは少し違う…：：：背筋が火照るような瞬間とか」

茂「背筋が火照る…：：：中々独特な表現ですね」

茂、皿を拭きながら、考えを巡らせる。

ふと、拓也の歌声を思い出す。

舞花、水を飲み干した後で、姿勢を正し、わざとらしく一つ咳払いをする。

舞花「えーと、それで、今日なんですけども、

夜って、お店開けるご予定ですか？」

茂「え？…ああ…今ちようど迷ってて」

舞花「もしよかったらなんですが…」

茂「あつ、いや、そうだ。はい、今夜は閉めます。けど、すいません。今日はちよつと行きたい場所があつて…すいません」

舞花「まだ何も言っていないんですが」

と、頬づえをつき、不貞腐れたように。

茂「ははっ…ですね…すいません」

と、頭を下げ、拭いていた食器を置く。

振り返り、レコードの音量を下げる。

茂の口元は微かに綻んでいる。

○ガード下の広場（夜）

ひとりベンチに座る拓也。

ギターを抱え、タバコを吸っている。

拓也「あー見つかったやいましたか」

拓也、苦笑いを浮かべ、首を掻く。

茂「久しぶり」

茂、缶ビールを片手に持っている。

向かいのベンチに座る。

茂「この前の公園行って、その後川沿いも一
通り歩き回ったんだ。結構なご足労だった
よ。少しはサービスしてもらいたいね」

拓也「勘弁してほしいなあ。せつかく一人で
気持ちよく歌ってたのに」

茂「確かにここも……人は全くないなあ」

と、辺りを見渡すようにして。

拓也「はい。とても静かな場所でございます」

茂「ちよつと近所迷惑なんじゃないか？」

拓也「まあ今のところ苦情は無いんで」

茂、ビニール袋から苺大福を取り出し、

拓也に投げる。拓也、受け取る。

拓也「え、まじですか。いいんすか？」

茂「コンビニで買った安いやつだけど」

拓也「ちよー嬉しいです」

茂「今日はリクエストとかしないよ。俺はい
ないものとして、自由にやってくれ。こっ
ちはこっちでやっつくから」

と、ビニール袋から柿ピーやイカソー

メンなどのおつまみを取り出す。

拓也「そう言われたって、こんだけ近い距離にいられたら、嫌でも意識しますよ」

大福を頬張り、もぐもぐ噛みながら、弦を触ってチューニングを合わせる。

拓也「何にしようかなあ」

拓也、渋りながらも吸いきったタバコを携帯灰皿に押し込み、演奏を始める。茂、目をつぶる。

拓也、ロックや歌謡曲など、何の統一感もない曲を三曲、休みなく歌う。

途中、茂が目を開け、拓也の様子を見ると、拓也も目をつぶっている。相変わらずとても楽しそうに歌っている。

× × ×

拓也「ひいー……ご清聴どうもでした」と、照れ臭そうに額の汗を拭う。

茂「相変わらず素晴らしいな」

ビールを脇に置き、拍手をする。

茂「失礼かもしれないが、以前よりもさらに

気持ちが入ってるように感じた。これはつまり、今日はいつにも増して、仕事で嫌なことがあったということになるのかな？」

柔らかい語調で、笑みを浮かべながら。

拓也「まーそういうことにしといてください」

ギターを脇に置き、タバコを啜える。

茂「またタバコか…」

そう呟きながら、何か引つかかるものを感じて、動きを止める。

茂「ストレス…仕事のスストレスとか言っ

たな…そりやまあストレスくらい誰しも

大なり小なりあるだろうが、もし差し支え

なければ、君はどんな仕事をしてるんだ？」

拓也、ゆっくりと大きな煙を吐く。

拓也「コールセンターです」

茂「……」

茂、つられてタバコを吸い始める。

拓也「別にそれほど特別しんどいってわけじ

やないですけどね。人並みだと思います。

まあでも、色んなお客さんがいますから」

茂、動かず、拓也の姿を凝視している。

茂「フジイ……」

拓也「え？」

茂「あんた……フジイさん？」

拓也「こわいこわい……なんすか」

茂「違う？」

拓也「いやそうですけど」

茂、一瞬天を仰ぎ、呼吸を整えるようにゆっくりとタバコの煙を吐き出す。

茂「俺の声に聞き覚えないかな」

拓也「はい？ いやあ……すみません……」

そう言った後で、痰が絡み、咳き込む。

茂、言葉を返さず、何かを待つように、

拓也の様子をじっと見守っている。

拓也、満を持して、例の咳払いをする。

茂「やっぱりそうか」

拓也「やっぱりってなに……あっ……」

二人、無言で見つめ合う。

拓也「いやいや……まじか」

茂「いつも申し訳ないね」

拓也「いえ……なんてゆうか……こちらこそ」

沈黙。

拓也「なんか……なんか歌いますか……」

茂「あんた。この後少し時間あるか？」

拓也「え？」

茂「ちよつと呑みにいかないか？」

拓也「あ、いや……まあ……あつても……」

茂「なにか予定がある？」

拓也「彼女と会うんですが」

○居酒屋

テーブルに座る三人。

拓也と裕美が並んで座り、正面に茂。

やがて店員が来て、それぞれの前にピ

ールが置かれる。無言で乾杯をする。

裕美「ホソノさんですよね……お噂は彼から

かねがね伺ってます」

茂「どっちの噂だろう」

と、拓也の顔を窺い見る。

拓也「あーえーと……どっちも？」

と、はにかみながら、ビールを飲む。

裕美「というか、すみません。これは：一体
どういう飲み会なのでしょう？」

拓也「ははっ……俺もよくわかってない」

ふたり、同時に茂を見る。

茂「ああ。申し訳ない。話すことだけ話したら、すぐに解散するつもりだ。こんな見知らぬ中年男との酒なんて、君たち若者にはたいそう毒だろうから」

拓也、俯いて、気まずそうに笑う。

裕美「何をされてる方なんですか？」

茂「え？」

裕美「言っても一期一会なので。さすがに最低限の情報はいただきたいなと思って」

茂「駅前で小さな喫茶店をやってる。夜はバーになったりもするが、まあ文字通りしがない商売だ」

拓也「へえ……そうだったんすね」

と、心底意外そうな驚いた顔で。

裕美、吹き出すように笑って俯き、

裕美「なんか……ごめんなさい。喫茶店とかやってる方って、もっとう……なんて言えばいいのかな……どんなときでも穏やかに微笑んでる……人生悟りきった仙人みたいな人のイメージがあったから……」

茂「まさか、クレームの電話をしつこくするような陰湿なやつだとは思わなかった、か」
裕美、申し訳なさそうに肩をあげる。

拓也「いやだけど……あれは本当にこっちに非があるんだから……」

茂「そんなフォロワーはいい。彼女の言うとおり、俺は、あり余った時間を、自分の冴えない気分を晴らすためのクレーム電話に使ったりするような、未熟で最低の中年喫茶店経営者だ。もちろん、不当なクレームを入れてるつもりはないけれど、だがこうして、普段対応をしている人間の顔を見ると、多少は気持ちも改まる。そうだな。これからはもう少し考えて行動しようと思う」

拓也「いえ……別にそんなことは」

と、決まりが悪そうに、ひろみを横肘で突く。裕美、毅然としている。

茂「しかし、都合のいい解釈になるが、そのおかげで、俺が与えたストレスのせいで、君は外で歌を唄い、俺はそれに出会えうことができた。何とも不思議な因果だな」

拓也、照れ臭そうに顔を伏せる。

裕美、拓也の横顔をチラッと見る。

茂「単刀直入に言う。君には才能があると思う。こう見えても俺は昔、多少音楽をやっていた、色んな人間を見てきた。君の歌には、人の心を揺さぶる作用がある。こんなやさぐれた中年男にそう思わせるんだから、間違いない。本当に素晴らしい声だ。それに君ほど楽しそうに歌う人を、俺は見たことがない。何というか、見ていて、こっちまで幸せな気分になる。だから……手段は何でも構わない。今の時代、いくらだって、仕事をしながらだって、やりようはある。とにかく、本気で音楽をやってみてほしい。」

それが言いたかった。俺からのお願いだ」

裕美、膝の上で拳を握りしめている。

拓也「勘弁してくださいよ」

と、ビールを勢いよく口いっぱい

み、虚ろな目でぼんやり宙を見る。

茂「どうしてなんだ？」

拓也「僕は人生を割り切ってるんです。こんなもんだろ、これで十分じゃん、って。

自分に必要以上の期待なんてしたくないし、失望もしたくない。できるだけ苦勞もしたくないし、手が届く場所にあるもの、身近な楽しいことだけをちゃんと守って、大事に温めて、さっぱり生きていきたいんです」

裕美、ジョッキの縁をさすりながら、

裕美「でもたつくん……言ってたじゃん」

拓也「ん？」

裕美「褒められて、嬉しかった、って」

拓也、真顔になり、再びビールを含む。

茂、拓也の顔をまっすぐに見ている。

裕美、そっと目をつぶる。

○【回想】カラオケ（深夜）

ソファアの端に座り、周りに合わせて体を揺らし、笑顔で手拍子をする裕美。大音量で流れているのは最新の流行曲。机上には大量の酒とフードが散乱していて、マイクを持つ数人の男女はソファアに立ち上がり、踊り狂っている。

裕美「ちよっとトイレ行ってくるね」

と、隣に座る友人にそっと耳打ちし、一人で部屋を出る。廊下で壁にもたれかかり、退屈そうに天井を見上げる。と、隣の部屋から音が漏れ聴こえる。

古い歌謡曲。男の声。綺麗な歌声。

裕美、思わず意識を奪われ、その場でしゃがみこみ、目をつぶって聴き入る。

拓也「うー喉いったあ……」

と、コップを持ち、部屋から出てくる。

裕美、咄嗟にスマホを耳に当て、誰かと電話しているフリをする。

裕美「うん……いやだからそれはさ……」

と、それっぽく適当な言葉を発する。

拓也、ドリンクを補充し、戻ってくる。

壁にもたれてしゃがんでいる裕美を一

瞥し、二人、わずかに目が合う。

× × ×

友人「遅かったね。だいじょぶ？」

と、部屋に戻った裕美に声をかける。

歓声叫声溢れ返る部屋の中で、裕美、

拓也のことが頭から離れない。

三十分ほど経つと、裕美、今度は何も

言わず、コップを持って、部屋を出る。

ドリンクを注ぎ、廊下のさつきと同じ

位置に座り、飲みながら、耳を澄ます。

ひと昔前のJ-POPが聴こえてくる。

相変わらず綺麗な歌声。曲間に微かな

咳払いが聞こえる。裕美、ふと自然に

笑みがこぼれ、何故だか少し涙ぐむ。

店員「あのー……なんか大丈夫ですか？」

と、気まずそうに裕美へ声をかける。

裕美「あ、いや……全然何でもなくて……」

店員、怪訝な表情で歩き去っていく。

× × ×

再び拓也が部屋から出てくる。

裕美、咄嗟にスマホを耳に当てるが、

ドリンクを注ぐ拓也の後ろ姿を見て、

ゆっくりと膝元にスマホを下ろす。

拓也、戻ってくる。さっきと同じ位置

に座る裕美を見ながら、部屋に入る。

拓也「え？……えっ？……なに……なんすか？」

裕美、拓也の後ろについて、そのまま

拓也の部屋に入っていた。

裕美「……違うんです……全然ナンパとか……」

そういうのじゃなくて……」

拓也「いや……別にナンパとは思ってないで

すけど……なんか用ですか？」

裕美「ここに居てもいいですか」

拓也「んーと……なぜ？」

裕美「……」

拓也「逃走中とかですか？……かくれんぼ？」

と、冗談ぽく微かにニヤつきながら。

裕美「ミツバチです」

拓也「はい……？」

裕美「はちみつの匂いがしました」

拓也、呆気にとられたように、扉の前
で立ち尽くす裕美を眺めている。

拓也「ははっ……えーと……僕はどうすれば

いいんでしょうか？」

裕美「私のことは気にせず、引き続きお楽

しみください」

拓也「まじで言ってます？」

裕美「はい……はちみつです」

と、真面目な顔で、拓也を見つめる。

拓也、俯いてうなじを搔きながら、

拓也「困ったなあ……本当に苦手なんですよ。

人前で歌うのって……」

裕美「人じゃないです。ミツバチですから」

拓也「まじか……じゃあまあ今日は特別って

ことで……けどその前にちよっと酒を……

ビールかなんか頼んでいいですか？」

裕美「はい」

拓也、立ち上がり、内線電話を取る。

拓也「なんか……要ります？」

裕美「じゃあ……私もビールで」

× × ×

拓也、目をつぶり、熱唱している。

裕美、放心したように聴いている。

○同・居酒屋

茂「すみません。お会計を」

と言い、ジョッキのビールを飲み干す。

店員、伝票を持ってくる。

拓也「あ、いや僕たちも……」

茂「いい」

と、半ば強引に勘定を済ませる。

拓也と裕美、恐縮そうにその様子を見ている。茂、改まって深呼吸をする。

茂「俺は：紛れもない赤の他人だ。君のこれまでの境遇も今の生活も、何も知らない。当然、偉そうなことを説くような権利なん

て無い。でも、これだけは言わせてくれ」

拓也、顔を上げ、茂を見る。

茂「人生は平等だよ。最近つくづくそう思う。長かろうが短かろうが、どれだけ平凡に生きようが、どれだけ破天荒に生きようが、結局のところ、きっと大して変わらない。君はさっき、期待も失望も苦勞もしたくないだって、そう言ってたな。だけど、平凡に生きてたって、そう見える人間の生活にだって、上り下りは必ずあるだろう。当たり前だが、生きてりやみんな色々あるんだ。そして、一生を通して辿った感情の波線は、誰しも同じくらいの場合に落ち着くんだと俺は思う。だから、良い悪いじゃないし、勝ち負けもない。単なる一本道だ。もしかしたら、初めから全部決まってるのかもしれない。でも、だからこそ、時には馬鹿げた期待を試してみたり、最適解なんて無いはずの選択に頭を悩ませることが、無駄なことだなんて俺には思えない。だって、

全部必然なんだから。偶然出会った見知らぬクレマーから、無責任にこんなこと言われたのも、たぶん、君の運命なんだから」

拓也、真顔のまま唇の端を噛む。

裕美、涙目で下を向いている。

茂「あーくそ。若者にこういうこと語るような大人にだけはなりたくねえって、ずっと思ってたのに、今日で晴れて失効だな」

と、卑屈そうに笑いながら立ち上がる。

茂「じゃあ俺はこれで失礼するよ。完全な言い逃げだ。ある意味テロだな。つくづく最低な大人だ。その代わりと言っちゃ何だが、これからはよほどのことがない限り、おたくのコールセンターに電話もかけないし、街で見かけても声はかけないようにする」

茂、ひとりで店を出ていく。

拓也、残ったビールを傾けながら、

拓也「ああ…しんどいわあ…」

と、無理矢理に笑顔を作って。

裕美、まだ下を向いている。

○拓也の自宅

電気の消えた暗い部屋。

ベッドへ仰向けになる二人。

裕美「ねえたつくん……」

拓也「ごめん裕美。今日はセックス無理だわ」

裕美「そんなのいい」

拓也「今日はもう寝るよ。おやすみ」

拓也、反対を向く。しばらく拓也の背

中を見つめた後で、裕美も反対を向く。

互いに目は開けている。

○高層ビジネスビルのワンフロア

盛大な内定式が行われている。

大勢の学生の中、スーツを着て椅子に

座っている裕美。

役員の男性がスライドを使い、厳かな

表情で会社の理念を話している。

緊張と期待の入り混じった顔で、その

話を聞く学生たち。

○小洒落た洋風レストラン

内定者懇親会が催されている。

取り分けられた食事をつまみながら、
近くの人と笑顔で言葉を交わす裕美。

× × ×

裕美、席を立ちトイレに。

個室に入り、スマホを見る。

拓也からの連絡は無い。

小さく息を吐き、天井を見上げる。

フロアに戻り、笑顔で会話に混じる。

○コールセンター

目をつぶり、瞑想するように腹の前で

両手を組んで、姿勢よく座る拓也。

いつも通りに対応をこなしていく。

○ビルの屋上・喫煙所（昼）

金網のそばに立ち、タバコを吸う拓也。

虚ろな視線で街を見下ろしている。

足が小刻みに、忙しなく動いていて。

○公園（夜）

茂、ゆっくりと歩いてくる。

噴水の前で立ち止まる。

拓也はいない。

○ガード下の広場（夜）

茂、ベンチに座っている。

正面のベンチに拓也はいない。

○小川沿いの緑道（夜）

ひとり歩き回る茂。

拓也の姿はどこにもない。

茂、俯いて卑屈そうに小さく笑い、タ

バコに火をつける。歩き去っていく。

○カラオケ（深夜）

何かを振り切るように、ひとりで熱唱
している拓也。

酒を何杯もおかわりしては、絶えず歌

い続ける。が、その表情に笑顔はない。

× × ×

マイクをテーブルに置き、ソファーに
だらんと座る。ぼんやりと宙を眺めて。

○喫茶店の入り口（夕）

店の鍵を閉め、扉の掛け札を「C L O

S E」に裏返す茂。通りを歩いていく。

花屋の横に私服姿の舞子が立っている。

茂「すみません。待ちましたか」

舞花「めっちゃ待ちました」

茂「ごめんなさい」

舞花「二ヶ月ですよ？」

茂「二ヶ月？」

舞花「ご飯いきませんかって、誘った日から」

茂、目を伏せ、疚しげにはにかむ。

茂「お店、予約してくれたんですよね。あり

がとうございます。どっちでしたっけ……」

マップを見ようとスマホを取り出した

とき、ちょうどメールが届く。

浩太へシゲさん。お久しぶりっす。すげえいい子がいたんで、共有です。偶然見つけました。動画の本数少ないし、まだ再生数も全然回ってないし、なんか見慣れない妙な前振りあるけど、声、ちょーいいです〜

メールにはYouTubeの動画が添付されている。茂、リンクを開く。

アカウントは匿名。画面は暗く、ギター越しに胸元だけが映っている。

拓也「えー……初めてあげるの……とても緊張してます……カバーの曲ですが……」

声が途中で途切れ、咳払いが聞こえる。特徴的な咳払い。甲高い、例の咳払い。

拓也「歌います。聴いてください」

茂、立ち尽くしたまま画面を見ている。

舞花「どうかしました？大丈夫ですか？」

茂「ええ……すいません……少しだけ待ってもらっていいですか」

舞花、不安そうな顔で、小さく頷く。

茂、スマホを耳に当て、目をつぶって、
流れてくる音源を聴く。聴き入る。

× × ×

茂へ素晴らしいな。声がいい

返信して、スマホをポケットにしまおう。

茂「お待たせしました。行きましようか」

舞花「何かいいことでもあったんですか？」

茂「え？」

舞花「ニヤニヤしてる」

茂「いや：別に」

茂、店先のラベンダーを見つめる。

茂「ラベンダーの匂いっていいですよね」

舞子「好きなんですか？」

茂「ええ。とても」

舞子「今度持っていきます」

茂「いやいいですよ」

舞子「え……？」

茂「俺が買いにきますから」

と、晴れやかな顔で笑いかける。

舞花、俯いて嬉しそうにはにかむ。

二人、歩いていく。

○カラオケ（夜）

拓也、ギターを脇に置き、テーブルに置いていたスマホの画面をタップする。

× × ×

裕美、息を切らして部屋に入ってくる。

裕美「ごめん：遅くなった」

拓也「全然待ってないよ」

穏やかな拓也の顔と横のギターを見て、糸が切れたように頬がゆるむ裕美。

裕美「今日は私めっちゃ歌うから」

勢いよく上着を脱ぎ、マイクを持つ。

拓也「久しぶりだもんな」

裕美「たつくんもちゃんと歌ってよね」

拓也「うん。でもやっぱり緊張するなあ……」

裕美、忙しくデンモクをいじる。

拓也「あ、その前にさ」

と、立ち上がり、内線電話を取る。

拓也「裕美、ビール？」

裕美「ビール」

曲が流れ始める。

拓也「うわ。すごいいい曲」

裕美「たっくんのだよ」

拓也「え、俺？」

裕美「はい」

と、強引にマイクを渡す。

拓也、目をつぶって、渋々歌い始める。

一曲歌い終わる。

裕美「やっぱりはちみつだ」

と、独り言のように呟く。

拓也「ん？」

裕美「ううん。何でもない」

ビールが届く。二曲目が流れ始める。

裕美、再びマイクを拓也に渡すと、ビ

ールを口に含み、笑顔で目を閉じる。

タイトル『イージーライフ』

おわり